

子どもの歌唱の現状

—日本語の「ことば」と音高に着目して—

樋口しずか 沢登芙美子

要 旨

本研究は、子どもの理解を深めるために、歌唱の現状を把握することが、基礎であると考えた。そこで、斉唱時における個々の子どもの歌唱から、日本語の「ことば」と音高に着目して、聞き取り調査を行い分析した。

その結果、以下の4点が明らかになった。

- ①日本語の「ことば」の持つ自然な旋律だと歌いやすく、ことばの動きに反した音高だと、子ども自身が日本語のことばに素直に音高を付けて、節回しを作ることがわかった。
- ②子どもは、自分の歌いやすい音域に歌い替えていることがわかった。
- ③音高に身振りを付けることが、有効であることがわかった
- ④日頃の音楽活動において、指導者の声を「聞くこと」を大事にすることで、音高を正確に合わせて歌えることができることがわかった。

以上のことから、歌唱教材選びと日頃の音楽活動のあり方が重要だと考えられる。

キーワード：日本語 音高 音域 歌唱教材

1. はじめに

本学科の学生は、将来、幼稚園、保育所および小学校の教育に関わる可能性が高い。保育士、幼稚園教諭および教員は、子どもが表現しようとする心を敏感に受け止められるよう感受性豊かでないといけない。それゆえに、本学科では、子どもの教育、保育に関する実践的な知識および技術を体得させ、すぐれたコミュニケーション能力を育成する目的で授業が行われている。音楽は、コミュニケーション能力の育成において、欠かせない教育方法の一つと言える。幼稚園の音楽活動や小学校の音楽科授業の中心になるのは歌唱活動である。そこで、子どもを理解するためには、まず子どもたちの歌唱の現状を把握することが基礎であろう。ゆえに、斉唱時における子どもの歌唱の聞き取り調査を行った。本調査では、特に日本語

の「ことば」と音高に着目して比較、分析し、考察する。

表記方法については、以下の通りとする。

- ・音高表記については、本研究は、日本語の「ことば」と音高に着目した研究であるため、一点ハおよび一点二などの日本語式を用いる。
- ・「↓」においては、低めに歌っていることを示す。
- ・原曲に対しては「旋律」、子ども達が歌い替えている時は「節回し」という表記を用いる。
- ・節のあることばは、ひらがな。決まったメロディーはなく、リズムのあるとなえ言葉は「トナエ」とカタカナを用いる。
- ・「歌える」という調査基準は、フレーズの開始音が、原曲と異なってもフレーズの構成されている音程が同じ場合、「歌える」と評価する。

(所 属)

山梨県立大学 人間福祉学部 人間形成学科

・ 譜例は代表的なフレーズを示すものとする。

2. 対象と方法

2-1 対象

A 幼稚園・3歳児 25名 4歳児 25名 5歳児 25名

B 幼稚園・3歳児 7名 4歳児 7名 5歳児 7名

C 小学校・1年生 1クラス 24名

2-2 方法

1) 調査期間

A 幼稚園・2014年10月～2015年3月

B 幼稚園・2015年3月

C 小学校・2014年5月～6月

2) 調査方法

- ・ A 幼稚園においては、年齢別に日常歌唱している歌を調査曲として保育者による指導を実施した。著者らが、毎月3回、園の静かな部屋で朝の自由時間（1時間程度）に、聞き取り調査をした。朝、登園してきた年齢別に、5, 6人のグループで調査した。曲を思い出すために無伴奏で、1回だけ全員で斉唱した。その後、1人ずつ個別に開始音は提示せず、無伴奏で歌った。A 幼稚園は、年少4クラス、年中3クラスおよ

3) 調査曲

表1 年齢別調査曲

| 学年 | 曲目 | A 幼稚園 | | | B 幼稚園 | | | 小学1年生 |
|----|--------------------------------------|-------|----|----|-------|----|----|-------|
| | | 年少 | 年中 | 年長 | 年少 | 年中 | 年長 | |
| | かえるのうた ドイツ民謡 | ○ | ○ | | | | | |
| | 山の音楽家 ドイツ民謡 | ○ | ○ | ○ | | | | |
| | 大きな栗の木の下で イギリス民謡 | ○ | ○ | | | | | |
| | かわいいかくれんぼ 作詞・中田喜直 作曲・サトウハチロー | ○ | ○ | | | | | |
| | おもちのうた 作詞・佐藤義美 作曲・山崎はちろ | | ○ | ○ | | | | |
| | でぶいもちゃんちびいもちゃん 作詞・まどみちお 作曲・湯山昭 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | アイアイ 作詞・相田誠美 作曲・宇野誠一郎 | | | ○ | | | | ○ |

び年長3クラスの編成である。朝の自由時間での調査のため、対象児は、同じクラスの幼児ではなかった。そのため調査曲に対して、クラスごとの取り組み状況を質問用紙で調査した。その結果、よく歌っていたと回答が多かった曲のみを調査曲とした。その中から、外国曲でよく歌われている3曲と、日本人の作詞、作曲で季節感のあるもの3曲を選び調査曲とした。

- ・ B 幼稚園においては、A 幼稚園で調査曲に決まった曲を著者らが指導した。朝の自由時間に年齢別に、園の静かな部屋で行った。無伴奏で、曲を覚えてもらう程度に事前に歌唱練習を行った。その後、一人ずつ個別に、開始音は提示せず無伴奏で歌った。
- ・ C 小学校においては、教材は、学校で使用している検定教科書¹⁾から選択した。楽器やC Dの伴奏はつけず、3回クラス担任による指導を実施した。その後1週間以内に、著者らが学校を訪問し静かな部屋で、1人ずつ個別に調査を行った。開始音は提示せず、無伴奏で歌った。
- ・ 調査のすべてをビデオで録画し、ピアノのピッチと照合し、分析した。

表1は、年齢別調査曲を示す

3. 分析結果と考察

楽譜1かえるのうた

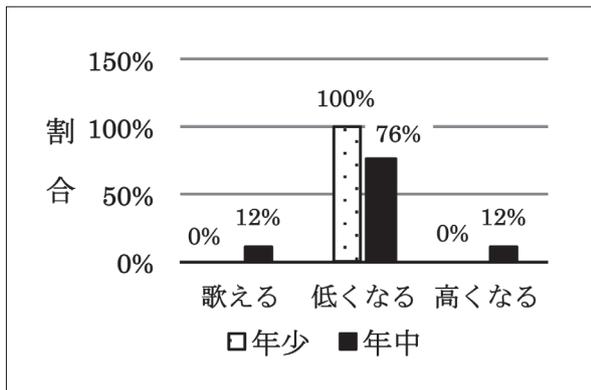
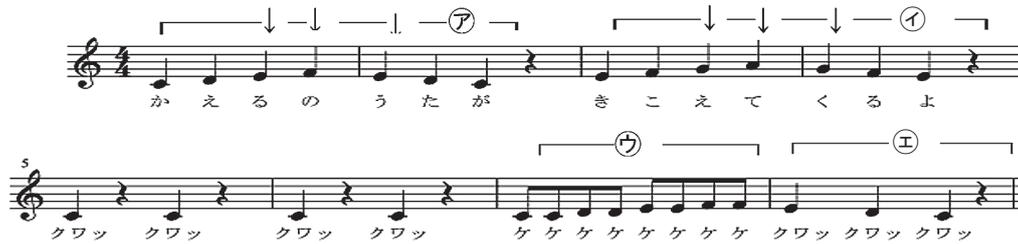


図1 楽譜1㉞の歌い方

図1は、楽譜1㉞の歌い方を示す。年少は、全員が↓が低くなって歌えてなかった。年中になると「の」のことばのところを少し高めに歌う幼児がいた。この曲は、年少から歌っているので、↓を高く歌うことがわかってきたためと考えられる。この点に関しては、旋律を把握して表現できていない結果だと考えられる。つまり西洋音階を正確な音高で歌唱するのは、難しいと思われる。

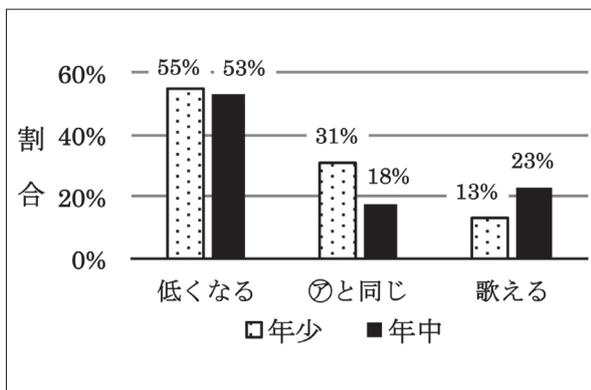


図2 楽譜1㉟の歌い方

図2は、楽譜1㉟の歌い方を示す。年齢に関係なく、フレーズの頭の音は、比較的正しく歌っていたが、それ以外の音は、低めに歌っていた。さ

らに、楽譜1㉞と同じような音高で歌っていた年少児が多かった。これは、多少音高の違いは理解できているが、表現できないことを表していると思われる。

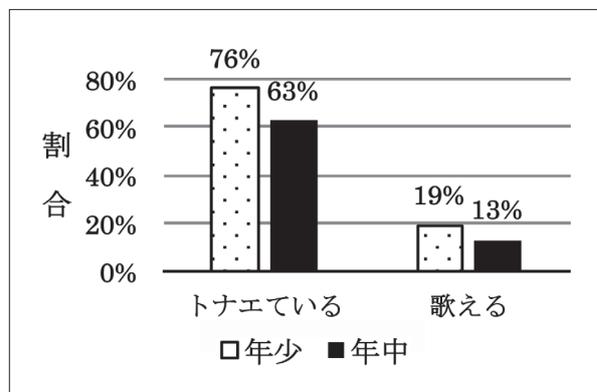


図3 楽譜1㊱の歌

図3は、楽譜1㊱の歌い方を示す。トナエていた幼児が6割以上いた。年少児においては、76%という結果になり、節回しが作れないと思われる。幼児は、「ケケケ」という擬声語に対して、カエルの鳴く情景を、無意識のうちに感じているのではないと思われる。さらに「歌える」幼児が年少のほうが多少多かったが、この事については、もう少し検討の余地がある。

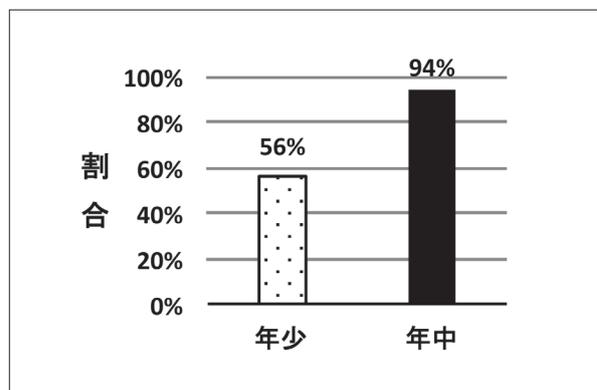


図4 楽譜1㊲の歌唱の正確さ

図4は、楽譜1㊦の歌唱の正確さを示す。年中においては、9割以上の幼児が、正しい音程で歌えていたことがわかった。西洋音階の終止感覚は、学習効果の表れとして、年齢が増すと理解できてくることが推察される。この曲は、保育者にとっ

ては、一見易しそうな歌だと認識されているように思われる。しかし、西洋音階が多く使われているため、日本語の持つ自然な音高で曲が構成されていない。その結果、幼児が、音高を正確に歌うのは、難しいと考えられる。

楽譜2 山の音楽家

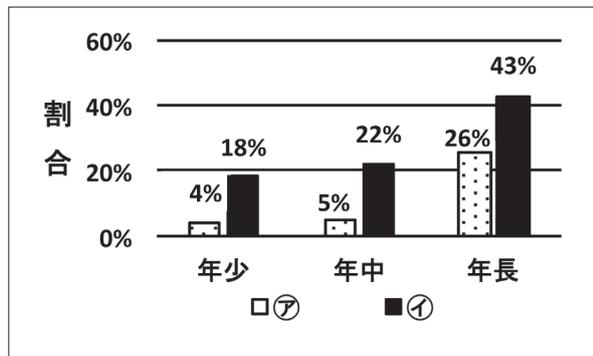


図5 楽譜2㊦と㊧における音程の正確さ

図5は、楽譜2㊦と㊧の音程の正確さを示す。開始音においては、年中は、イが多く、年長は、イおよびトが多かった。㊦と㊧は、同じ完全4度の音程である。しかし、この調査結果からは、全ての学齢において㊧のほうが、正確に歌えることが、顕著にみられた。開始音は、低い音高で歌い始めている。それは、初めのフレーズの一番高い音高が一点トよりも低くなるように歌っているからだと推察される。先行研究²⁾において一点トよりも低い音高のほうが正確に歌えるという知見と関連していると考えられる。㊦と㊧は同じ音高で書かれている曲であるが、㊦は不正確で、㊧はほぼ正確に歌っていた。その原因として考えられるのは、㊦の「わたし」ということばの持つ節回

楽譜3 大きなくりの木下で

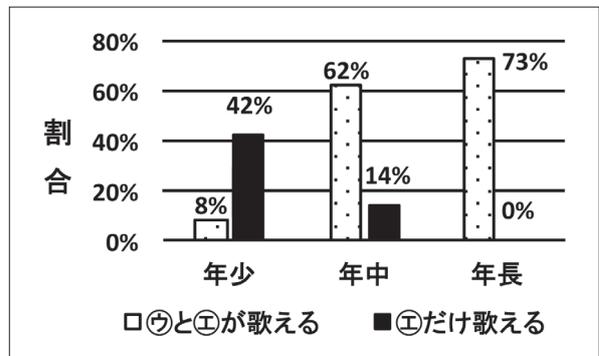


図6 楽譜2㊩と㊪の歌唱の正確さ

しがよくわからないため、音程がとれないのであろうと考えられる。それに対して、㊩の「じょうず」は、ことばの持つ音高が、旋律にそっているからであろう。

図6は、楽譜2㊩と㊪の歌唱の正確さを示す。楽譜2㊩のフレーズの頭の音は、年少は、一点へが多く、年中は、一点ホおよび一点トが多く、年長は、一点イが多かった。学齢が上がると、開始音が高い音高で歌える幼児が増えてきている。年長では㊩が歌える幼児は、㊪も歌えていた。年少においては、㊩だけ歌える割合が72%と高い。この調査結果から、年少においても、西洋音階の終止感覚がわかる幼児が多いというのがみえてきた。

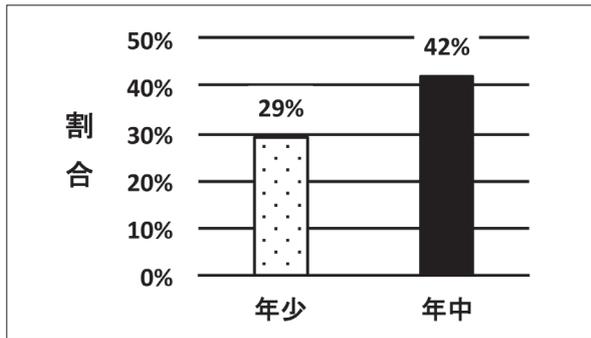


図7 楽譜3㉗の歌唱の正確さ

図7は、楽譜3㉗の歌えた歌唱の正確さを示したものである。学齢問わず、ほとんどの幼児が歌えていない。㉗の↓の音を低めに歌っている幼児は、㉘の↓の音も低めに歌っていた。

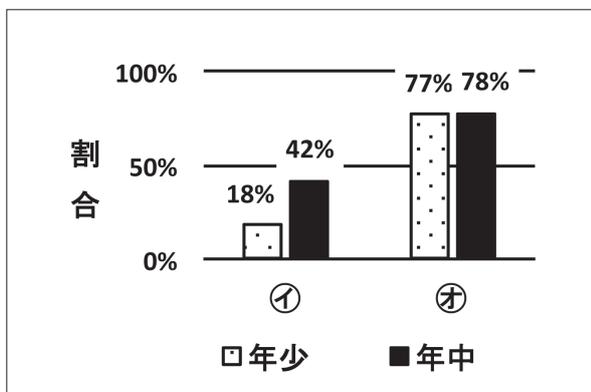


図8 楽譜3㉙と㉚の歌唱の正確さ

図8は、楽譜3㉙と㉚の歌唱の正確さを示す。楽譜3㉙および㉚は、同じ旋律を使っているが、㉙は歌いにくく㉚は歌いやすい。この点に関して楽譜4 かわいいかくれんぼ

ひよこがね おにわでびよこびよこかくれんぼ

どんなにじよずにかくれても ちいさいあんよが

みえてるよ だんだんだれがめづかった

歌い替えていたフレーズを示す。学齢に関係なく歌い替えている幼児が多かった。また開始音は、年少、年中ともに、イがもっとも多かった。

図11は、楽譜4㉙の歌い方を示す。譜例2は、楽譜4㉚を歌い替えたフレーズを示す。フレーズ

は、幼児は、㉙が半終止とは、わからなくてもまだ終わりではないという感覚で、適当に歌ってしまうのだろう。㉚のフレーズは、曲の最後なので、終止の感覚がわかってきているのだろうと考えられる。

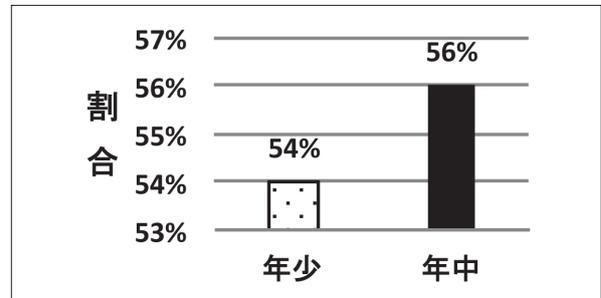


図9 楽譜3㉚の歌唱の正確さ

図9は、楽譜3㉚の歌唱の正確さを示す。学齢に関係なく、半数以上の幼児が、正確に歌えていた。楽譜3㉚のフレーズの頭の音は、いずれの学齢も、一点ホおよび一点ヘが多かった。楽譜の音高より低い音高で歌っている幼児が多い。このフレーズは、「あそびましょ」という日本語のことばのもつ音高通りの旋律になっているので、歌いやすいのだと考えられる。

この曲は、外国曲であるため、日本語の持つ自然な音高で作られていない。ゆえに、幼児が、自然に歌いやすい音域に歌い替えた結果、高い音高は低めに歌ってしまうと思われる。

図10は、楽譜4㉗の歌い方を示す。譜例1は

の頭の音は、学齢に関係なく、トおよびイが多かった。㉙は話しことばの「あんよ」の音高が逆行した音高になっている。そのために、日本語が持っている自然な音高に、子ども自身が歌いやすい節回しに替えている表れであると考えられる。

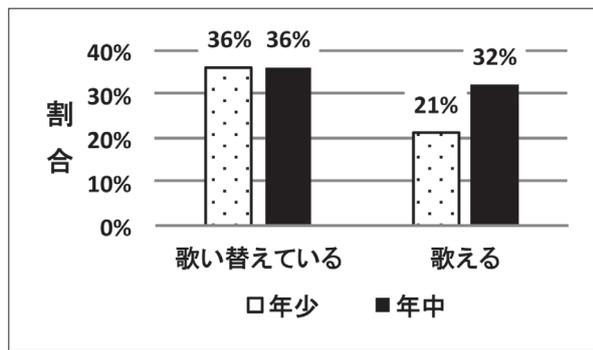


図 10 楽譜 4 (ア)の歌い方

譜例 1

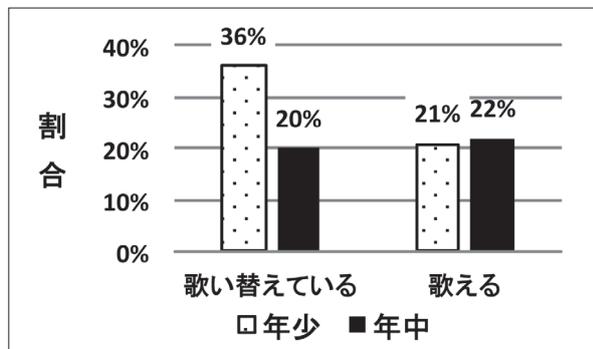


図 11 楽譜 4 (イ)の歌い方

楽譜 5 おもちのうた



図 13 は、楽譜 5 (ア)の歌い方を示す。年中においては、半数以上の幼児が歌い替えている。年長も半数近くが歌い替えている。譜例 3 は、歌い替えたフレーズを示す。開始音においては、年中は、イおよびロが多く、年長は一点ハが多くいた。楽譜 5 (ア)を歌い替えている年長は、全員が一点より、低い音で歌いだしている。その結果、楽譜の音高より、低い音で歌いだしている幼児が多い。楽譜 5 (ア)と(イ)は、フレーズの頭の音は違うが、リズムが同じである。ことばの持つ自然な音高で歌い替えたために、同じような節回しで歌う幼児が多くいたと思われる。

譜例 2

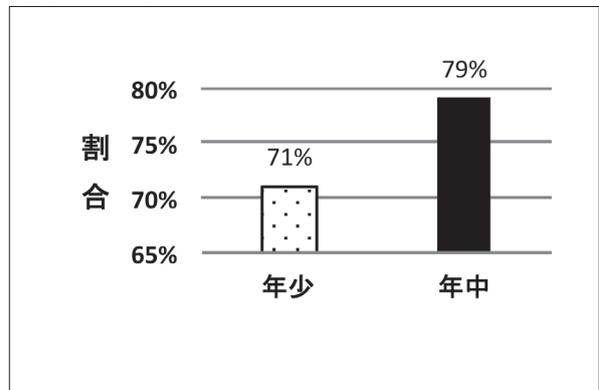


図 12 楽譜 4 (ウ)の歌唱の正確さ

図 12 は、楽譜 4 (ウ)の歌唱の正確さを示す。学齢問わず、7割以上の幼児が正確に歌えていた。フレーズの頭の音は、学齢問わず、一点ニおよび一点ホが多かった。楽譜 4 (ウ)は、わらべうたの二音旋律である。ことばの持つイメージが、旋律になっているため、歌いやすくなっていると考えられる。ゆえに、歌える幼児が多くいたと思われる。この曲においては、日本語の持つ自然な音高を大事にして、歌いやすい音域に作り替えやすい曲だと思われる。

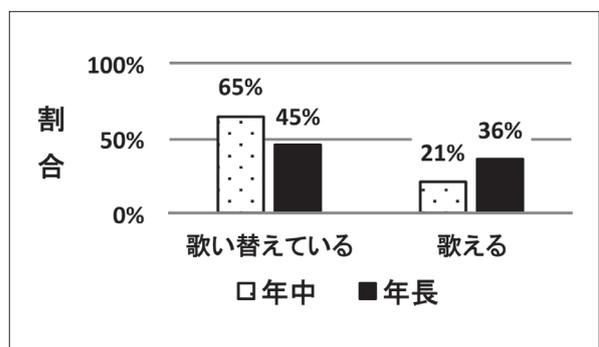


図 13 楽譜 4 (ア)の歌い方

譜例 3



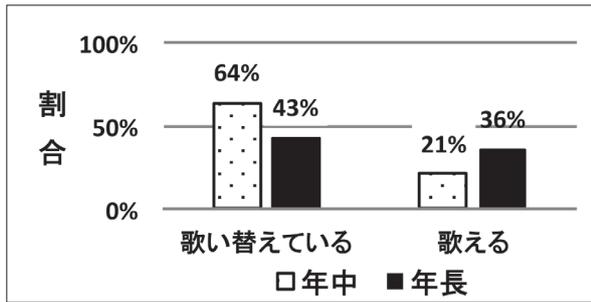


図 14 楽譜 5 ㊦の歌い方

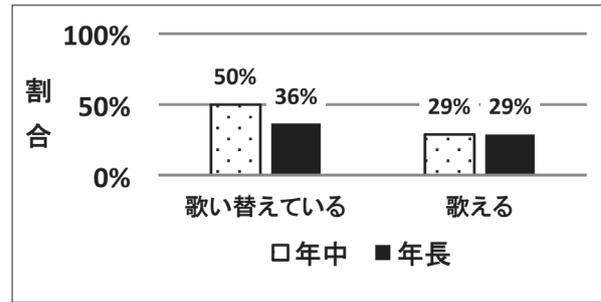


図 15 楽譜 5 ㊥と㊦の歌い方

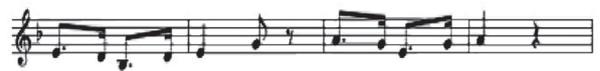
譜例 4



図 14 は、楽譜 5 ㊦の歌い方を示す。譜例 4 は楽譜 5 ㊦を歌い替えたフレーズを示したものである。フレーズの頭の音は、一点へおよび、一点二が多くいた。いずれも楽譜 5 の音高より低い音である。

図 15 は、楽譜 5 ㊥と㊦の歌い方を示す。譜例 5 は、楽譜 5 ㊥と㊦を歌い替えたフレーズである。㊥および㊦のフレーズの頭の音は、学齢問わず、一点イが多かった。楽譜 5 ㊥と㊦は、こと

譜例 5



ばが問いと答えになっている。幼児は問いフレーズ㊥と答えフレーズ㊦を同じ節回しで歌い替えている。この曲は、「おもち」ということばが、幼児にとって身近な存在であり、イメージしやすかったと考えられる。そのため、歌いやすい音域で、歌いやすい節回しで歌っている個所が、多く見られた。それは、幼児自身が、日本語の持つ自然な響きを感じて、作り替えて歌った結果の表れだと推察される。

楽譜 6 でぶいもちゃん ちびいもちゃん



図 16 は、身振りの有無で音高の正確さを示す。楽譜 6 ㊦において高い音を歌う意識がなく、音高があまり変わらない幼児が多くいた。そこで、著者らが、音が高いことを意識させるために、右腕を上にはやし人差し指を上に向ける身振りを付けて歌って聞かせた。その後、幼児が㊦を歌う時に、その身振りを付けて、歌ったところ図 16 の結果になった。すべての学齢において、身振りを付けて歌ったほうが、正確に歌えることがわかった。手で高さを表現することで、「音が高い」ということが、聴覚だけでなく視覚からも理解でき、歌えるようになったと考えられる。

図 17 は、2つの幼稚園生に開始音を著者らと

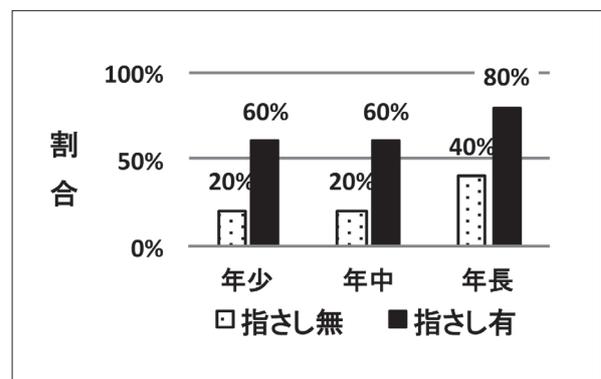


図 16 身振り有無での音高の正確さ

同じ声で歌うよう提示して、正確な音高で歌えた割合を示す。A幼稚園において、開始音を著者らの声で提示しても、そのことに意識が希薄な幼児

る子どもの割合を示す。すべての個所で、半数以上の子どもが低めに歌っていた。

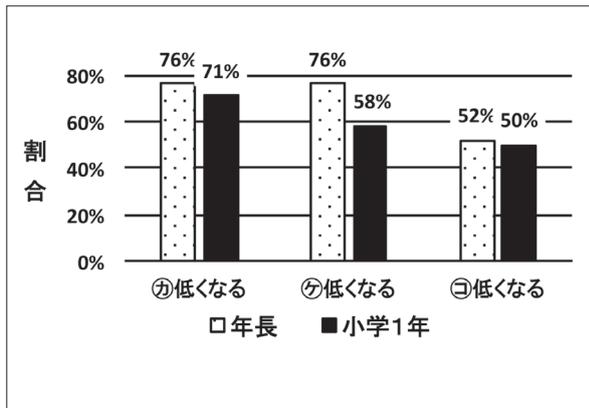


図 21 楽譜 7 ㊸㊹㊺の歌い方

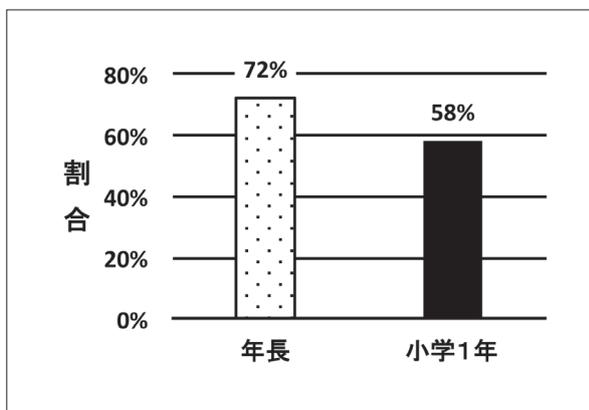


図 22 楽譜 7 ㊻の歌い方

譜例 6



図 22 は、楽譜 7 ㊻の歌い方を示す。学齢に関係なく、半数以上の子どもが、歌い替えて歌っていた。譜例 6 は楽譜 7 ㊻を、歌い替えていたフレーズを示す。フレーズの頭の音は、年長は、多い順に、一点ハおよび一点ニであった。小学 1 年生は、多い順に一点ヘおよび一点ホであった。

この曲は、同じ言葉が繰り返されている。子どもは、ことばの持つイントネーションがあいまいであるため、どのように歌ったらいいのか、手掛かりがなかったのではないと思われる。

4. 総合的考察

本研究では、個々の子どもの歌唱の実態を調査し、日本語の「ことば」と音高に着目した結果、

以下のことが明らかになった。

①日本語の「ことば」の持つ自然な旋律だと歌いやしく、ことばの動きに反した音高だと、子ども自身が日本語のことばに素直に音高を付けて、節回しを作ることがわかった。つまり、子どもには、伝承の経過でメロディーが変わっていく「わらべうた」と同じ感覚があることが、明らかになった。

②子どもは、自分の歌いやすい音域に歌い替えていることがわかった。伊藤真らは、音高に関しては、「G 4 以上の高い音域より G 4 未満の低い音域のほうが正確な音高で歌唱できる」³⁾と述べている。子どもは、音が跳躍したり、音階的に上行しても一点トよりも高い音にならないよう歌い替えている。そのことから、自然に音高を調整していることが、明らかになった。

③音高に身振りを付けることが、有効であることがわかった。今回の研究では、手で音高の高低を意識したことで、幼児は、音の高低を聴覚だけでなく、視覚からも意識できた結果、正確な音高が歌えるようになったと推察される。水崎誠は「Liao (2008) では幼児自身の身振りが、歌声の改善に寄与するものとして考えられる。この研究では対象児の 71,25% が、身振り付きで歌うことに対し好意的な回答を寄せたことも報告しており、注目される」⁴⁾と述べていることから、有効であることが、わかった。

④日頃の音楽活動において、指導者の声を「聞くこと」を大事にすることで、音高を正確に合わせて歌えることができたことがわかった。

三村真弓らは、幼児において「学年が上がっても、ピアノ音の音高を正しく弁別し、再生することは難しいことがわかる。」「音楽のリテラシーの育成のための指導においては、ピアノ音を用いるよりも、アカペラが望ましいことが示唆される」⁵⁾と述べている。

また、伊藤真らは「低年齢の幼児に関しては伴奏という外界からの音刺激に自分の声を合わせる操作よりも、自分の声に集中して歌唱する単純な操作のほうが、比較的安定した正確な音高で歌唱することができると推測される」⁶⁾と述べている。このように、音楽活動において、ピアノ伴奏に頼

らず、指導者自身の声で、子ども達に歌い、聞かせ、歌わせることが重要であると考ええる。

以上のことから、子どもの日本語の「ことば」に対する感性を大事にし、子ども達が作る節回しを大切にしている歌唱教材を選ぶことが、重要であると考ええる。

歌唱教材を選択する時には、今回の調査結果なども踏まえ、子どもの実態に適合した曲を選ぶことが不可欠であると思われる。歌を学ぶということは、その「ことば」が持っている意味ばかりでなく、伝統や歴史や文化を学ぶ基礎ともなるであろう。そのようなことから、歌唱教材選択は、重要なものと考えられる。音楽的表現を学ぶ上で、いい曲だと考えられている曲でも、子どもが実際に歌う歌唱教材としては、難しい場合もある。したがって歌唱教材は、単純なものを確実に積み上げていくことが、望ましい。本研究の調査結果には紙面の都合上、記述しなかったが、子どもの歌う時の表情から見ると、上手に歌える時は、節回しが自然であったり、また、簡単に作り替えられるような旋律を、楽しそうに作り替えていた様子が伺えた。

5. おわりに

本研究では、子どもを理解するために、日本語の「ことば」と音高に着目して、歌唱の現状を調

査した。その結果、歌唱教材選びと、音楽活動の教育現場における歌唱の指導方法が重要であることがわかった。本研究では、次の2つの問題点を感じられた。①調査対象者の月齢の調査が不十分であった。②調査対象の数にばらつきがあった。この問題点に関しては、今後の課題としたい。

謝辞

今回の調査にあたりご協力いただきました2つの私立幼稚園および私立小学校の幼児、児童および教職員の皆様に深く謝意を表します。

注)

- 1) おんがくのおくりもの1. 教育出版、p52
- 2) 伊藤真、他 (2011)「幼児の音楽的走力の育成に関する基礎的研究(1)」広島大学学部・付属学校共同研究機構研究紀要第39号、p105 - 110
- 3) 伊藤真、他：前出
- 4) 水越誠 (2014)「幼児の歌唱行動研究の動向」音楽教育学第44巻第1号 p26-31
- 5) 三村真弓、他 (2008)「幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究(1)」広島大学学部・付属学校共同研究機構研究紀要第36号、p95 - 101
- 6) 伊藤真、他：前出

Current status of children singing

Focusing on the pitch as a "word" in Japanese

HIGUCHI Shizuka • SAWANOBORI Fumiko

Abstract

This study to better understand children, to grasp the current state of the singing, thought to be the basis. Therefore, it was heard that the singing songs of each child, and analyzed for the mutual relationships between the melody and Japanese lyrics.

As a result, the following four points were revealed.

① It is easy to sing it's natural melody with the "words" of one Japanese.

When's the pitch that was contrary to the movement of words, the children themselves with a obediently pitch to the words of Japanese, it was found that to make a tune.

② Children, it was found that it is being changed to sing to their own singing easy range.

③ Be given a gesture to the pitch has been found to be effective.

④ In daily musical activities, the voice of the leaders and by to take care of the "listening", to be able to sing the pitch to exactly match, it was found.

From the above, the teaching materials of singing must be chosen and daily music activity of the way as we considered important.

Key words : Japanese Pitch Range Singing teaching materials